

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 19 日現在

機関番号：14101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720092

研究課題名(和文)滑稽本の総合的研究

研究課題名(英文)Study of Comic books in Edo period

研究代表者

吉丸 雄哉 (Yoshimaru, Katsuya)

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：10581514

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：「滑稽本出版年譜」の作成を完了させた。日本古典籍総合目録データベースで滑稽本に分類される本を中心に、『道中膝栗毛』初編(享和二年刊)の出版から慶応4年までに刊行された作品約350点の年譜の作成を行った。

滑稽本の主要作者である式亭三馬の年表を作成した。題簽や刊行年などを正確に把握できた。滑稽本の一分野である茶番本の研究である。茶番本の研究史、口上茶番本の概説、口上茶番の構造の分析、芸能として見た場合の口上茶番の特徴を解明を行った。

研究成果の概要(英文)：I created "The comic books publishing chronology(From Dotyuhizakurige (1802) to 1868)". I created the chronology of Shikitei Samba. I studied Farce books (they are called Chaban in Japanese) and published the paper about Chaban.

研究分野：日本近世文学

キーワード：日本近世文学 戯作 滑稽本 年表 式亭三馬 茶番

1. 研究開始当初の背景

滑稽本研究のための基礎的研究である、平成 22～23 年度科学研究費研究活動スタート支援「年表編纂を中心とした滑稽本の基礎的研究」の発展的研究に、本研究はあたる。

滑稽本の前段階として存在した洒落本は、全集に『洒落本大成』(中央公論社、昭和 53～63)が存在する。滑稽本と同じく中本であり、滑稽本の支流にある人情本は、滑稽本と同じく研究が進んでいない状態であった。しかし、科学研究費の補助を受けた研究結果をもとに、発生から文政期までの人情本を対象にした『人情本事典』(笠間書院、平成 22)が刊行されるなど、研究の基礎的な段階が近年において、急速に整いつつある。その間にある滑稽本は取り残された状態にある。主要作者である十返舎一九、式亭三馬、滝亭鯉丈らについて、研究並びに、翻刻が割合進んでいるとはいえ、それら主要な作者でも取り上げられない作品は多々ある。零細作者に関しては、より放置される状態にある。滑稽本で名をなした式亭三馬を申請者は研究対象としてきたが、滑稽本と呼ばれる作品群を通じて、江戸の小説の特性を深く解明するため、また、より精細な江戸文学史の構築のためには、滑稽本の研究が進んでいない現状は看過できないと感じていた。

2. 研究の目的

日本近世文学の中で、滑稽本と呼ばれる分野の作品を対象とする。具体的には、狭義の滑稽本である『道中膝栗毛』初編(享和二年刊)以降、作成された、滑稽を主題とする中本型の作品群を主に取り扱う。滑稽本の書誌調査で申請者が以前作成した滑稽本年表を増補・改訂し、「書名」「書名読み」「巻冊」「著・编者」「画工」「序跋」「出版元」「影印」「翻刻」「注」「参照」「作品概要」から成る、江戸時代に出版された滑稽本の年表を作成することを最大の目標とした。

また、『浮世風呂』『浮世床』といった著名な滑稽本作品を執筆し、主要な滑稽本作者として知られる式亭三馬の年表を作成することも目的とした。

個々の作品としては、滑稽本の中で茶番本として一群をなすものの、その全容や特徴の研究が十分になされていなかった口上茶番にまつわる本の研究を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

「滑稽本出版年譜」および「式亭三馬年譜」の作成に関しては、主要機関におもむき、原本、影印、マイクロフィルムの閲覧を行った。また蓬左文庫マイクロフィルムや大東灸記念文庫マイクロフィルムの購入を行い、それ

それを照らし合わせることで内容の確認を行った。

口上茶番本に関しては、該当するすべての作品を閲覧し、影印を収集したうえで、文責を行った。

4. 研究成果

(1) 研究最終年度の本年度は、本研究の最大の目的であった「滑稽本出版年譜」の作成を完了させた。日本古典籍総合目録データベースで滑稽本に分類される本を中心に、『道中膝栗毛』初編(享和二年刊)の出版から慶応 4 年までに刊行された作品約 350 点の年譜の作成を行った。以前の「研究者スタートアップ支援」で作成した内容の大幅に増補改訂を行った。

本年譜は「書名」「書名読み」「巻冊」「著・编者」「画工」「序跋」「出版元」「影印」「翻刻」「注」「参照」「作品概要」から成る。特徴として、初版本の版元を記載したこと、そして各作品について簡単なながらも概要を付したことである。当初計画していた、分類別の系統樹図の作成には及ばなかったが、本年表によってほとんど作品が分類可能になったはずである。本年譜は平成 27 年 7 月刊行予定の「三重大学日本語学文学 26 号別冊」に「江戸時代滑稽本出版年譜稿」として、掲載される。

今後、滑稽本を研究する予定の者は、本年譜を参照することで、善本の情報や所在、影印や翻刻の有無をすみやかに知ることができ、またそれぞれの内容をすばやく簡単に知ることができるようになった。

本年譜稿は江戸時代の滑稽本の出版年譜であり、未刊におわった滑稽本の写本約 30 点や明治以降に刊行された滑稽本のデータは基礎的なものを収集したものの、発表できるほどの調査・確認ができなかった。今後、折をみて、これらも継続して研究し、発表の機会をうかがいたい。

(2) 滑稽本の主要作者である式亭三馬の年表を作成した。成果は次の通りである。式亭三馬の年譜に関しては本田康雄『式亭三馬の文芸』(笠間書院、昭和 48)の巻末に年表がある以外は存在しなかった。式亭三馬の著作の影印を収集し、式亭三馬の伝記研究として詳しい棚橋正博『式亭三馬』(ペリかん社、平成 6)と比較し、さらに原本・影印・マイクロ・インターネット公開データをもとに年表を作成した。題簽や刊行年など従来のものに比べて、かなり正確に把握できた。伝記としては、従来の研究では曖昧であった部分、特に堀野屋・万屋との関係に新しい事実を見出すことができたことが成果といえる。

式亭三馬は十返舎一九と並んで、滑稽本の作者の中心人物であり、本年表の作成は滑稽本の研究に大きな前進をもたらした。狂歌本への入集状況を事細かに調査したため、狂歌壇との関係が明瞭になり、滑稽本研

究に利点があるのみならず、狂歌研究にも貢献する研究となった。

また、三馬とその門人について、狂歌贅や序文の有無を含めてその関係が記せた。本年譜の特徴として、善本を多く有する専修大学向井文庫本を参考にしていることがある。善本の見つけにくい草双紙に関して、貴重なデータが収録できた。

(3) 滑稽本の一分野である茶番本の研究で成果をあげた。

口上茶番とは、まず題を決め、つぎにそれとは一見関係のない品物(景物)を出し、それにかかわる地口や理由をつけてオチをつける一種の話芸である。18世紀なかごろに登場し、20世紀の初頭まで行われた。江戸を中心に行われたが大坂にも茶番のグループがあった。現在に伝わっていない話芸であり、口演を記録した茶番本によってその具体的な内容が知れる。立茶番が衣裳をつけ、立っての演技をとまなうのと異なり、座ったまま演じる点に特徴がある。芸能として口上茶番を見れば、特殊な要素がある。芸能はくりかえし演じることが基本であるが、口上茶番はオチが知れてしまうと面白くないため、一回性が通常の芸能に比べて高い。題は予め決めてあり、くじ引きで配分するものの、一回性を考慮するならば、同時代に行われた三題噺に近いといえる。座った口上を述べるのが口上茶番と厳密にはいえるが、実際には仕形(身振り)が入ったり、衣裳をつけておこなうものでも、一人で座ったまま演じるならば口上茶番と言ってよいものである。行うものたちは連(れん)と呼ばれるグループで狂歌連などを兼ねていたようである。この点も三題噺に似ている。茶番本を信じるなら女の演者もいたと思われる。舞台は高座を組むものもあるが、そうでないもののほうが多い。蟬燭が出ていることから、これも三題噺と同じく夜に演じられたのだろう。聴衆からお金をとって演じるものではなく、むしろ景物をおみやげ渡すところに特徴があった。茶番や素人芝居と同じで、江戸的なコミュニティの消滅にともなって、なくなってしまったものと思われる。その内容は基本的にはカケ・トキ・ココロをとまなう三段なぞと同じである。ココロが中心となり、それを見せる運びが重要となる。口上茶番といえども単に述べるだけではなく、仕形が入ってくる場合がある。なぞときには地口のほか、形の見立て、知識的なものを理由につかうものがある。もっと簡単な地口で見せるものがあり、順繰りに展開する。段返しと呼ばれる手法があって、まったく別なものにもう一度見立てるのだが、順を追ってつぎつぎに見立を変えていくことは口上茶番に多い。一人称でしゃべるとおりに書き留められるのが基本である。第三者から見て、仕形や口上を記すという形式にとうとうならなかった。滑稽本のなかで一人称でしゃべるものに似ている。噺本と同じく幕

末になると長編化する。

以上のことを解明したほか、茶番本の研究史を前段階におき、口上茶番本の概説、口上茶番の構造の分析、芸能として見た場合の口上茶番の特徴を解明して論文化を行った。

研究成果は、「芸能としての口上茶番」(『国語と国文学』91巻5号、東京大学国語国文学会、平成26・5)として発表した。当該論文は、先行研究および現存する口上茶番本をすべて網羅している。口上茶番本それぞれに内容の説明を行い、利便性が高い。また、口上茶番の構造が三段なぞであることをつきとめた。口上茶番研究史のなかで、決定的な論文になったのではないかと思っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4件)

吉丸雄哉、江戸時代滑稽本出版年譜稿、三重大学日本語学文学 26号別冊、査読無、2015、1-41

吉丸雄哉、芸能としての口上茶番、国語と国文学 91巻5号、査読有、2014、88-103

吉丸雄哉、式亭三馬年譜稿(二) 文化五年以降、三重大学日本語学文学 25号、査読無、2014、25-37

吉丸雄哉、式亭三馬年譜稿(一) 安永五年から文化四年まで、三重大学日本語学文学 24号、査読無、2013、45-53

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉丸 雄哉 (YOSHIMARU, Katsuya)

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：10581514

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：